

# 日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



## 補習授業校の改革に向けた調査にご協力ください!

目白大学学長・G-ONEプロジェクト座長 佐藤郡衛

G-ONEプロジェクトが始動し、本誌で「日本人学校・補習授業校タマテバコ」の掲載がスタートして、いよいよ1年になります。この3月号では、補習授業校の改革について考えてみたいと思います。補習授業校の調査を通して、学校の将来像を描き、その実現に向けた取り組みについて考えていきます。そのためには、まず調査にご協力いただける学校を募集します。みなさん、未来の学校づくりと一緒に考えてみませんか。



### 一緒に、学校の将来を考えてみませんか

今回は補習授業校の関係者のみなさんにメッセージを送ります。

G-ONEプロジェクトを立ち上げて一年が経過しようとしています。これまで本欄では、香港日本人学校、クアラルンプール日本人学校、そしてリマ日本人学校の取り組みについて紹介してきました。

香港日本人学校は樗木校長先生に「グローバルクラス」の取り組みについてご報告いただきましたが、そこから新しい日本人学校の方向性も見えてきています。私たちとしても日本人学校への支援を継続していきたいと思っています。

そして、このプロジェクトではもう一つの目的に、補習授業校への支援を掲げています。そこで今回は、補習授業校の関係者のみなさんへの呼びかけをさせていただきます。

補習授業校の実態把握をもとに学校の将来像を描き、その実現に向けてどのような取り組みが必要かを一緒に考えてみませんか。

補習授業校はとても多様化していますが、一律に支援を構想することができなくなっています。これから補習授業校を改革していきたいという学

校があれば、一緒に行動にうつしませんか。

まず、私たちが補習授業校にどのような課題意識を持っているかをお話しします。

### 新しい補習授業校に向けて

なげいま、「補習授業校の実態把握が必要か」についてお話しします。

第一に、補習授業校のあるべき姿を見直すためです。補習授業校は、「日本人学校も十分に存在しない時代に、海外に渡った子どもが、主として現地校等に通学しながら、土曜日や平日の放課後を利用して日本国内の学校で学ぶ国語等を学習するために設立された教育施設」であり、

日本の政府から財政支援を受けている学校というようにとらえられてきました。これは現地校に通学し、外国の子どもと共に学び、同時に日本人としての言葉、文化について学ぶ、これらの子どもを支援することが日本のグローバル化の見地からも重要だと考えられているからです。

また、多くの卒業生の経験談から、異文化に接する子ども達の心理的葛藤を解消する場としても機能していると考えられています。

さらには、帰国を予定する子ども達の国語等の補習の場のみならず、永

住者を含む現地教育を選択した者の国語等を学習する場としても機能することが期待されてきました。

しかし現実には、海外に居住する小中学生七万九〇〇〇人だけを見ても、その半数が日本人学校にも補習授業校にも通っていない子どもであり、近年この割合が増加する傾向が続いています。これは子ども達の多様化が進み、補習授業校の受け入れ態勢を含めて現在の教育の仕方だけでは対応しきれなくなっていることが理由ではないかと考えています。

補習授業校は子ども達の能力の育成という視点からみると三つの層でとらえることができます。

基底になる層は、「基礎的な学習能力の育成」です。学習習慣、学習意欲、そして考える力、論理的に表現する力、判断する力など基礎的な学習能力の育成です。

第二の層は「日本語力の保持・育成」です。補習授業校は子どもたちが日本に帰国しようがしまいが母語としての日本語力を育成する上で大きな役割を担うものです。

そして第三層は「バイリンガル」の育成」です。子どもたちにとって学習するために必要な高度な二つの言語能力を持つことはその後の人生にとって大きな強みです。

各学校の実態に応じてどの層に焦点をあてるかは違ってきますし、子どもの実態に応じても教育の力点の置き方に違いが出てきます。

いま一度、補習授業校の実態を把握し、その上で補習授業校でどのような教育を行うかを考えていく必要があります。

**第二に、実際のフィールドワークに基づいた実証的なデータを蓄積していくためです。**補習授業校は世界各地にあるため、なかなか現地に赴くことができません。そのため国内において間接的で二次的な資料をもとに支援の在り方を検討してきましたが、本当は直接、現地調査をもとに実態に迫る必要があります。

ただ、真の実態に迫ることはなかなか難しいのが実情です。これまでも補習授業校の調査が行われていますが、みなさんはその結果が本当に実態にあっているか疑問に感じたことはないでしょうか。

そうした場合、調査結果を当事者の側からとらえ直すことが必要のように思います。今回は、いくつかの補習授業校に直接赴き、関係者と一緒に実態を把握したいと考えています。また、直接赴くことができなくても、収集したデータから結果を解釈していくときに、一緒に結果につ

いて考察したいと考えています。今回、私たちは、こうした調査の進め方についてもみなさんと意見を交わしながら実施していきたいと思っています。

**第三に、他の補習授業校との比較を通して各学校の特徴を把握するためです。**比較という視点は、いうまでもなく、他の学校を通して、実は自分たちの学校を知ることです。いま、日本の教育の良さを海外で取り入れようという動きがありますが、日本の教育の良さは自分たちではなかなかわかりにくいものです。

例えば日本の小学校の規律、学習内容、学校外活動、学校の清掃など、私たちにとっては当たり前のことでも、海外から見ると優れているといわれます。いま日本の教育のいいところを学ぼうという機運が出てきていますが、これも比較という視点があつてのことです。

今回、各学校の特徴を他の学校と比較できるように調査を行っていきたいと思っています。そのことで自分たちの学校の強みも課題もみえてきます。

**第四に、補習授業校をその置かれた地域や国の教育全体の枠組でとらえていくためです。**補習授業校に就学する子どもたちは、通常は現地校

やインターナショナルスクールに就学していますが、そうした学校や地域との関わりで、補習授業校をとらえていく必要があります。

そのため今回、地域や現地校等との関係も調べたいと思っています。また、保護者や子どもたちの学校選択の理由も重要です。なぜ、補習授業校を選択するのか、あるいは選択しないのか、その要因を探ることで、今後の補習授業校の進むべき方向を考えることができます。

**第五に、グローバル化という視点から補習授業校をとらえ直すためです。**グローバル化は、海外の子どもへの教育を日本への帰国という一方向的なルートだけではとらえられなくさせています。グローバル化は、補習授業校の教育の目標や内容、さらには方法の問い直しを迫ることになります。

先に補習授業校の三つの層についてお話ししましたが、補習授業校で高度の二言語能力を伸ばすことは、グローバル人材の育成にもつながります。補習授業校こそグローバル人材を育成する上で重要な役割を果たせるはずです。こうした人材育成のためにどのような教育ができるかを共に考えていきたいと思っています。

## 新しい学校づくりを共にめざしましょう

こうした課題意識をもとに補習授業校の調査に取り組みたいと思っています。

調査は時間と労力を要しますが、私たちは関係者のみなさんと共に調査をして、その結果をフィールドバックして、みなさんの学校の改革を支援していきます。

しっかりと実態を把握し、自分の学校の特徴や強みを活かして、新しい視点から補習授業校を構想していくことができるような調査にしていきたいと思っています。

なお、今回の調査は、学校の目的、教育の内容・方法、子どもの実態、日本語教育、家庭・地域についてなどの項目に、すべて自由記述式でご記入いただくものです。ご負担も大きいと思いますが、この調査を通して、子どもたちにとってより良き新しい学校の姿を描いてみませんか。これから一緒に取り組んでいくために、「調査に協力してもいい」という学校がありましたら、海外子女教育振興財団のG・O・N・E・Pプロジェクト事務局まで、メールにてご連絡ください。お待ちしております！

〈メール somu@joes.or.jp〉